

書評 Nalani Hennayake, Culture, Politics, and Development in Postcolonial Sri Lanka

著者	荒井 悦代
権利	Copyrights 日本貿易振興機構（ジェトロ）アジア経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) http://www.ide.go.jp
雑誌名	アジア経済
巻	49
号	6
ページ	60-63
発行年	2008-06
出版者	日本貿易振興機構アジア経済研究所
URL	http://hdl.handle.net/2344/00007254

Nalani Hennayake,

Culture, Politics, and Development in Postcolonial Sri Lanka.

Lanham : Lexington Books, 2006, xv + 211pp.

あら い えつ よ
荒 井 悦 代

I

本書で著者は、スリランカの一般大衆に共有された開発のイメージをスリランカに「固有な開発言説」と表現し、これを援用して実施された政策を描写している。固有な開発言説では、かつてのスリランカの社会を自給自足的で生態学上バランスがとれ、持続可能で文化的に満たされた「輝ける過去」として捉え、それを再現していく過程こそが開発であると規定する。過去の栄光の再現を求める動きは、抑圧された国々に時折みられる傾向であるが、スリランカでは、「輝ける過去」の再現を求める要求がノスタルジックな底流として細々とあったのではなかった。国家が政権を維持するために意図的・組織的に大規模に行い、国民もそれを歓迎していた、と著者は指摘する。スリランカの開発は市場経済的な方針に従っているように見える。しかし実は固有の言説が見え隠れする複雑な構図になっているというのが著者の主張である。

著者はペラデニヤ大学地理学部で教鞭を執っている。地理学部の教授が開発を論じるのは不自然であるように思われる。そんなところにもスリランカの特異な事情が絡んでくる。スリランカでは地理学は人文系のメジャーな学問分野で、主要な大学には必ず設置されている。なぜなら地理学部が農業振興や資源開発を目的として設置された経緯があるからだ。地理学部はまさに開発とともにあったといってよい。著者の夫も地理学部の教授で著者と同じく活動的な

学者である。

本書の構成は以下のとおりである。

- 第1章 イントロダクション
- 第2章 支配的な開発思想と対抗思想
- 第3章 ポストコロニアル期のスリランカにおける開発の概念化
- 第4章 固有化、パワーポリティックス、ポストコロニアル国家
- 第5章 カルチャラル・ポリティックスと開発の儀式化
- 第6章 開発の「人民化」という新しいイデオロギー
- 第7章 文化、政治、抵抗のポリティックス
- 第8章 政治的正統性から文化の感受性

II

第1章では、全体像を提示する。ここで強調されるのは、スリランカに固有の開発言説は決して、シンハラ人の優位性を主張し、タミル人を排斥するようなシンハラ・ナショナリズムと混同されるべきではないという点だ。

スリランカでは1983年にコロンボで大規模な暴動があり多数のタミル人が犠牲になった。それ以降、現在の民族紛争の原因を過去の歴史に見出そうとする動きが強まった。ThambiahやSpencer, Browら外国在住の人類学者らはシンハラ仏教徒の歴史を再構成して、狂信的なシンハラ・ナショナリズムを現在の危機の根源であると断罪した。

しかし著者は、固有の開発言説がたまたまシンハラの歴史や文化的背景と強く結びついているためにシンハラ・ナショナリズムのプロパガンダと誤解されてきたと主張する。そしてそのために、固有な開発言説に基づいた様々な興味深い政策を解釈し、評価するシステムティックな研究がなされなかったと批判している。

第2章では支配的な開発論およびマルクス主義的な開発論とスリランカに固有な開発言説の違いが説明される。前者は普遍的で、単線的なものと説明され、文化は開発にとってほとんど無関係、あるいは

何らかの関係があるにせよキリスト教的な文化以外は切り捨てられている。それに対してスリランカにおける固有な開発言説では、文化を取り入れ、開発を単線的なプロセスとは捉えない。つまり過去は原始的で未開発ではない。むしろ「輝ける過去」として再生すべきと考えられている。西欧的な開発論が経済的な発展を最終目的とするのに対して、固有な開発では経済、文化、政治などの様々な局面の全体的な発展を目的とする。こうした相違点にもかかわらず固有な開発言説は、西欧的な開発論と真っ向から対立するものではない。その担い手が国家である点も特徴である。

第3章では、スリランカにおける固有な開発言説の概念化に用いられた3つの基本要素を示す。第1はシンハラ仏教徒的イデオロギーであり、ここでは指導者である国家は、かつての王がそうしたように文化・生活を守る守護者でなければならない、と国家の役割を規定する。第2は輝ける過去概念である。灌漑システムを発達させドライゾーンにかつて繁栄した、自給自足的で持続可能なシステムをもつ村が理想化されたことを説明する。こうした村の象徴となったのが寺、ため池、水田の3つの組み合わせである。寺は宗教を、ため池は王の責任（建造・保持）を、水田は繁栄を象徴する。第3には仏教哲学が挙げられる。仏教哲学は個人と社会の調和、精神的・文化的な内面と物質的な外面の調和を重んじる点が入り入れられた。ここでは平等も重視される。固有な開発はこれら3つの要素の組み合わせによって特徴づけられる、経済、政治、文化の持続可能な関係である。政治・経済的な達成は為政者の慈悲によって再配分され、文化や宗教的側面に投資されて、人々の道徳的・精神的な必要性を満たしてこそ意味があるとされる。一般的な開発概念との違いはシンハラ語による表現にも表れている。例えば経済的な成長は「ワルダナ」、精神や社会の成長全体を表現するときは「サンワルダナ」が用いられる。

第4章では、1956年に独立後の英語エリート支配から政治的な転換があり、このころから固有の開発概念が用いられ始めたことと説明する。スリランカの独立は大衆運動によってもたらされたものではなく、

英語教育を受けキリスト教に改宗したエリート層にイギリスが統治を引き渡したことによる。独立後の代表的な政治家としてD・S・セナナヤケが挙げられる。彼はドライゾーンの復興を掲げ、輝ける過去の復興にも触れている。この点では固有の開発言説を用いた先駆けのようにみえるが、次世代の政策に比べてより実利的で、観念的でない。

政治的転換がおこった1956年というのは、折しも仏陀の生誕2500年を祝賀する年にあたり、これまで表れなかった仏教復興主義がうねりをみせた年だった[川島 2006]。そのうねりに乗り、シンハラ大衆に近い立場を示したS・W・R・D・バンダラナイケが政権につく。シンハラ仏教徒大衆と文化的背景を接近させた指導者の出現をきっかけとして固有な開発言説が明確に用いられ始めた。その後もシンハラ仏教徒というスリランカにおいて圧倒的に大きな層から確実に支持を得るために、固有な開発言説が利用されるようになった。開発言説は、歴史と文化を基調としており広く共有されているので、支配階層の押しつけではないという印象を与えることができる。したがって政府や支配階層にとって固有な開発言説は彼らと一般大衆を結びつける便利な媒介役であり共通言語だった。本章では具体的にS・W・R・D・バンダラナイケ、サルボダヤで有名なアリヤラトネなどの思想・手法を紹介する。バンダラナイケは、ガンディーの思想も採用しながら自給自足的経済、具体的には米生産を推進するために、農民を国家の屋台骨と持ち上げ国による農業保護を打ち出した。アリヤラトネによるサルボダヤ運動も仏教哲学と輝ける過去のアイデアの組み合わせが基礎になっていると説明される。

第5～7章は具体的な事例を挙げながら、固有な開発言説が変化して行く様を描いている。そのときの社会や経済状況や指導者の性格に応じて、用いられる方は目まぐるしく変化する。

第5章では1977年以降、開放経済政策が急速に進展し社会が変容する最中において、開発と固有の文化をすり合わせようとする政治的プログラムが詳細に明らかにされる。具体的には、構造調整プログラムに沿って導入された新しい経済の変化や資本主義

的發展を正当化するために、これらの変化を農村のシンハラ文化とすり合わせ、国民に理解・受容してもらうのが目的であった。そのためにジャヤワルダナ大統領（1978～89年、77～78年は首相）は昔からある儀式を取り入れた。それは古代の王が種まきを始める鍬入れ儀式で、著者は当時の小説を引用しながら説明する。政府はこの儀式を利用することにより、近代的な開発を農民に身近なものにすることができると考えた。また、農民に対して王のように責任をもち、社会平等を実現しているかのような振る舞いもできた。農民の側でも、儀式が政治的な意図をもつものとなりながら、自らの利益になるように、いわば利用したとされる。

マハヴェリ開発などは一見すると近代的技術を用いた大規模プロジェクトであり、その目的も経済合理的であるが、国民にたいする説明の仕方は、当にスリランカの輝ける過去を再現しようとする意図が読み取れると著者は主張する。

第6章では、ラナシンハ・プレマダーサ大統領（1989～93年）の政治と固有の開発言説の実践の具体例を挙げている。プレマダーサは低カースト出身で、英語エリートとはほど遠い。彼は開発政策として貧困層への基本的ニーズの充足を住宅および生活インフラの提供という形で大規模に行った。ポピュリストと批判されるが、ここでも儀式化と「村を作ることは国を作ること」という固有の開発言説を巧みに用いた。著者は、住宅プロジェクトの際に行われる展示会（ガム・ウダワ）について、都市と農村および近代と伝統との間の心理的距離感を縮める役割を果たしたと説明している。貧困層に直接便益を提供する手法は、経済改革の一環として従来の福祉政策を縮小せざるを得なかった国家による隠れた福祉政策であった。

第7章では、一般大衆がグローバリゼーションへの対抗策として、固有の開発言説を用いた様子が描かれる。開発言説の利用は政治家だけのものではなくなった。エコ・ツーリズムを標榜したカンダラマ・ホテル建設反対運動において、当初反対派は環境破壊を問題視していたが、ホテルが灌漑池の近くに建設されるという点を捉え、文化・宗教面でのマイ

ナスの影響を主張するようになった。また、音楽や芸術への影響も論じられる。

第8章はまとめである。

III

本書で示された解釈によって、評者がスリランカに関して抱いていたいくつかの疑問がクリアになった。1点は、スリランカがIMFや世界銀行などの海外援助機関にみせる姿と国民に対してみせる姿の間のギャップである。海外援助機関には財政赤字削減要求を一方で満たしながら、国民に対しては全く正反対の福祉政策を打ち出す。明らかな矛盾であるが、スリランカの開発過程において、王が統治者の義務として民を保護するという立場から、政府は福祉政策を完全に撤廃することはできず、復活あるいは新設する必要に迫られたのだらうと解釈できる。

「固有な開発言説に基づく政策」は現政権を理解するのに重要なキー概念となると思われる。マヒンダ・ラージャパクセ現大統領（2005年～）は、父親がスリランカの二大政党のひとつであるスリランカ自由党設立にかかわった、いわゆる2世議員ではあるが、コロンボ出身でもなければ西欧で教育を受けた英語に堪能ないわゆる伝統的なエリートではない。スリランカの歴史上初めての南部出身者である。公の場では白い国民服をまとい、赤い肩掛けがトレードマークになっている。仏教界からの支持も厚い。大統領選挙戦でも自らの選挙公約をマヒンダ・チンタナヤとシンハラ語で呼んだ。公約のなかで農業や村落開発重視の姿勢をみせていることからすると、固有の開発言説を利用するプレマダーサ方式を再現しているようにもみえる。公約だった政策も実際に徐々に施行されつつある。このようなマヒンダの政治手法や政策における固有の開発言説を利用した開発戦略は、現状のように民族紛争が激化しているなかでは、著者がしばしば指摘するように、シンハラ・ナショナリズムと混同されてしまう危惧がある。近年、過激なシンハラ・ナショナリズムが台頭していることは確かである。したがってスリランカで起きている現象を判断するためにはシンハラ・ナシ

ナリズムの一環なのか、開発戦略なのかを冷静に観察する必要があるだろう。

アジアの内発的発展の例として、本書でも議論されたサルボダヤと100万戸住宅政策が取り上げられている [西川 2001]。サルボダヤが説明される際は、しばしば仏教思想の見地から説明される [メーシー 1984]。著者はスリランカの開発の文脈からより深い意味を見出している点が新鮮である。スリランカにおけるNGO活動の多くはサルボダヤを模しているの、市民社会の動きを理解する助けともなる。

サルボダヤといえば、プレマダーサ大統領は1991年から92年にかけて苛烈なサルボダヤ攻撃を行ったが [Perera, Marasinghe and Jayasekera 1992], その理由は不可解なままであった。著者は第4章注41において個人的な確執と説明している。プレマダーサにとっては本来国家が王のように庇護を与えその見返りとして支持を受けるべき対象としての農村へ、サルボダヤがあまりに深く入り込むことが脅威だったに違いない。文化や固有の開発言説の申し子ともいえるプレマダーサは最も敏感に危機を感じ取っていたが故に、あらゆる手段を用いてサルボダヤ攻撃を行ったのであろう。

スリランカにおいて固有な開発言説が利用され、政策にも人々の生活にも密着した形で表れたのはスリランカに特有であると著者は主張するが、他の国でもこのような過去の栄光の再現という現象は存在したと思われる。スリランカが特殊なのは、一般的な開発と文化・宗教が両立した点にあるだろう。スリランカは、経済的な成功をある程度治めており、南アジアのなかでは他の国に比べて1人当たりGDPが頭ひとつ大きい。人的資源の発展も著しい。高い人的資源能力を活かして爆発的な発展を期待されることもあったが、何とも言えずスローで、時折

後戻りさえする歩みを続けてきた。この背景にはもちろん継続している民族紛争の影響がある。しかしそれだけでなく、文化や宗教に折り合いをつけながら進まざるを得なかったスリランカの特事情があったと考えるべきなのかもしれない。

さて、上記のように本書によってスリランカについて日頃感じていた疑問のいくつかが氷解したが、ひとつ注文もある。著者はシンハラ・ナショナルリズムを悪者扱いするBrownなどに対しては、結論を導き出すほど十分な調査を行っていないと批判する。しかし著者の主張の根拠も小説や歌、数人へのインタビューなどで、決して十分とは言えない。数十年前の事例についての調査・実証は困難だろうが、農業機器の広告に用いられた王様の写真 (p.123) のような近年の事例についてならもう少しサンプルが集められたのではないかと残念に思えた。

文献リスト

<日本語文献>

川島耕司 2006. 『スリランカと民族——シンハラ・ナショナルリズムの形成とマイノリティ集団——』明石書店.

西川潤編 2001. 『アジアの内発的発展』藤原書店.

メーシー, ジョアンナ 1984. 『サルボダヤ——仏法と開発——』めこん.

<英語文献>

Perera, Jehan, Charika Marasinghe, Leela Jayasekera 1992. *A People's Movement Under Siege*. Colombo Sarvodaya Book Publishing Service.

(アジア経済研究所地域研究センター)